

スイス家庭事情の変遷

ギンジツク恭子

森を軽くジョギングするのが習慣になっている。森に行くまでに少し歩くのだが、その途中で、時々乳母車を見かける。それを押しているのは、たいてい初老の女性か男性。時に、若い男性のこともある。それを見ると、スイスもずいぶん変わったなあと思う。

その昔、息子が赤ちゃんだった頃は、乳母車を押して散歩しているのは、たいてい若い女性だった。かくいう私も、そういう母親の一人だった。もう30年ほど前になる。当時は、結婚して母親になると、たいていの女性は家庭に入ったものだ。

スイスに来たばかりの頃、ひとつ強い印象を受けたことがある。それは、父親ひとりの収入で家計が成り立っている家庭が多いということだった。もちろん、私の知る限りではということ、一

般化はできないかもしれない。ただ、ある意味で、豊かな国なのだなあと思ったことは確かだ。しかし、女性の立場に関しては、日本と比べてスイスの方が保守的なのは、という感想を抱いた。実際、スイスの女性が参政権を得たのは、1971年のことだ。長い間、女性は夫に従い、家庭を守っていたらいいという考え方が主流を占めていたようだ。私が来た80年代前半でさえ、夫が家

計を仕切っているところが多いと聞いた。妻は、夫から家計費をもらってやりくりするわけだ。日本では、外では夫を立てこそすれ、一般的に、家の中では妻がお金も含めて実権を握っている家庭を見てきた私には、それは驚きだった。

スイスでは、職業見習い制度があつて、男女共に職業を身につける。ただ、初めに述べたように、私が来た当時は、女性の場合は出産とともに、子育てのために家庭に入る人が多かった。それには、社会的仕組みから来



グラールス州エルム地方

る理由もある。まず、保育園というものが少ない。また、スイスでは、日本のように学校給食がない。子供達はお昼に帰ってきて、家で昼ご飯を食べる。そして、午後また学校に出かけていく。低学年の場合は、午前の授業の始まりが日によって遅いこともあるし、帰ってくる時間が早い場合もある。また、どの学校も、水曜は午前中で授業がおしまになる。つまり、学齢の子供が二人以上いる場合は、子供がそれぞれ出たり入ったりするので、母親はなかなか家をあけられないということだ。また、夫も、住んでいる地域で働いている人が多かったので、お昼には帰ってきて、家で昼食を取っていた。つまり、昼ご飯は、家族揃ってのメインの食事だったわけだ。だから、主婦は、午前中は買い物に料理に忙しかった。それから、もうひとつ印象深かったのは、「主婦」という言葉への意識について。これは、義母の影響もあるかもしれない。日本では、謙遜してのことか「ただの主婦」などと言う人もいるが、主婦の仕事が一つの専門職のようなものだということを、義母から学んだ。彼女は、当時の同世代の人がたいいそうであったように、20代の前半で結婚して家庭に入った。そして、プロの主婦として家政を一手に切り盛りしてきたのである。

その義母も十数年前に亡くなった。その前からすでに兆しを見せていた社会の変化は、21世紀を迎えて拍車がかかり、時代は大きく変わった。スイスに来たばかりの頃、「スイス人は急な変化を好まない」という言葉を知人から聞いたのを覚えている。けれども、そんなスイスにも、新自由主義の波と情報革命の波が容赦なく押し寄せてきた。以前なら、子供が生まれてから義務教育が終わるまでは家にいて、その後、自分の職業に復帰できた女性たちも、急激な社会の変化によってそれが難しくなる。だから、たいいの女性は、母親になってからも、仕事を続ける道を選ぶ。そのためには、自分の親か夫の親の支援、あるいは、夫との家事育児の分担が必要になる。孫が生まれた知人たちを見ると、一週間に一度か二度孫の世話をしている人も多い。そうやってやりくりしながら、仕事と育児を両立させているようだ。ただ、そういう親がない人は、なかなか難しい。学齢前は保育園に預けて、やがて学校に通うようになれば、日本の学童に当たるところに預けることになるが、これは収入によって費用が違ってくる。同じお昼ご飯でも値段に差が出るわけだが、それでも、特に専門職の人などは、高額になってもキャリア中断はしたくないのだろう。母親同士のネットワークでお互いに預けあつて、交代に自宅でお昼を食べさせたりしている人もいる。いずれにしても、仕事と育児の両立には、いろいろとオーガナイズしなければならぬ。

この数十年の間に、変化を好まないと言われたスイスもずいぶんと変わってきた。家庭における男女の役割もそうだ。若い夫婦の間では、家事の分担も普通になつてきている。昔に比べて、男女は平等に近づいてきたものの、一方で「期待される男性像」や「麗しき女性像」というものはまだ残っている。お互い「男はつらいよ」「女もたいへん」というところかもしれない。現実社会の変

化と意識の進化にはズレがあるものだ。今の時代、子供たちも変化の波に晒されている。子供は人類の未来だし、宝だ。それは、日本もスイスも世界もそうである。何よりも、子供への視点を忘れない社会でありたい。

